

醇乎として醇

巽 悟朗

(同志社校友会長)



「ああ見えざる神の御手は／江戸なる安中藩板倉侯の邸内にて／彼をして呱呱の声を揚げしめ給えり／天保十四年正月十四日」。武家に嗣子なる長男の生れしかば／シメタと祖父は喜び叫びぬ／且つ注連飾る松の内なれば／七五三太と名づけられたり。これは湯浅半月が新島 襄の一生をなぞった詩作の一番と二番で、一月十四日は陽暦の二月十二日にあたります。安中藩江戸屋敷跡の神田一ツ橋には、いま新島生誕の地を記念する碑が立っています。天保十四年（一八四三年）といえますと、浦賀沖の黒船出現に先立つこと十年ですから、新島を維新の風雲児たらしめた運命の転回まさにはじまろうとしたときであります。

七十番におよぶ湯浅半月の詩は同志社校友会発行の『新島先生記念集』（昭和十五年 第五版同四十二年）にみえますが、十八番と十九番にはつぎのように歌われております。「ああ見えざる神の御手は／福土宇之吉氏をして彼を／米国船に脱禁便乗せしめ給へり／元治元年六月十四日」。此夜手拭を被り包を負い／大小二刀を大工道具と見せかけ／彼の扮装したる大工姿は／ナザレの青年イエスの

如し」。

運命は新島をして、維新の風雲のなかから一直線に南北戦争直後のニューイングランドへ飛び込ませることになりました。これは、精神日本から「ニューイングランド」という清教徒の流風余韻がなお漂い漲っていた精神米国への留学でした。当時の米国からの家信に新島は、「断然万里の波濤を航せしは、まったく国家のおん為に、寸力を竭さんとの志願なり」と認めております。新島のなかには、自由と文明への強烈なあこがれが渦巻いておりました。とはいいまでも、彼の夢がアメリカでなければどうしても実現できなかったわけではありません。ヨーロッパの国であってもよかつたとの指摘もあります。このときも岐路に立った新島に神の御手の導きがあつたにちがいありません。

さきの『新島先生記念集』では、徳富蘇峰の一文が巻頭を飾っております。同志社創立六十周年における記念講演の収録であります。わたくしは若い頃から折にふれこれを再読三読してきました。蘇峰の言葉を借りて新島の精神を説くとしますと、つぎのようにならうことができます。日本の志士としての素質と教養を身につけ、二十有三歳の過敏なる良心の持主であつた新島は、「あたかも鉄と磁石とが互に相い吸引するように、米国で自由・独立・清潔のキリスト者としての思想と生活を享受し、醇乎として醇なる紳士」、つまりリファインドセントルマンとなりました。一八五八年に慶應義塾を創設した福沢と十七年後に同志社を興した新島とは、明治の日本における青年の気風と品性に大きな感化をおよぼした双璧であります。前者の物質的知識の教育にたいして後者が精神的道徳の教育を代表するゆえんもここにあります。

新島は強靱な新しいキャラクターの形成を重視しました。これは新島自身の言葉に端的に示されております。「——政治家としては独り利巧なる政治家たるに止まらず、併せて民を愛し国を愛する

の政治家たらしめんと欲し、これを文学者としては独り能文なる学者たるに止まらず、併せて正義を愛し真理を愛する誠実なる学者たらしめんと欲し、これを事業家としては独り経営力作の事業家たるのみならず、併せて正直憐愛なる事業家たらしめんと欲し、これを人民としては独りその衣食に汲にたるのみならず、併せてその品行性質気風の上において更に高尚甘美なる所の生活を得せしめんことを欲す」と。

ご承知のように、新島は神学校のみならず、キリスト教に近代科学の教育を加えた総合大学の構想を温めておりました。蘇峰はこの壮図の具体化に、維新の志士たる新島の真面目があるとして、つぎのように述べております。「もし先生を教育家といわば、きわめて広汎なる意義における教育家といわねばならぬ。教育家を教育するの教育家だ。政治家を教育するの教育家だ。実業家を教育するの教育家だ。一切の民衆を教育するの教育家だ。」

ところで、世に校友・同窓で組織する団体は学校の数だけあります。しかし、キリスト教主義にもとづき精神と品行を陶冶された者の集いは、明治十八年（一八八五年）に創設された同志社校友会のみであります。伝統という言葉にはひとつの生き方、未来をみつめる意志がふくまれているといえるでしょうが、校友会はその証しとしまして新島の生誕百五十年を記念し、新島会館に新たに別館を加えることになりました。新島の精神は、これをセレモニー用の訓話の学にしてはなりません。そのためにも、「明治の教育家として新島は真の勇者であったし、正を履み、義に勇み、道に殉ずる男であった」と喝破した蘇峰の言葉を校友一同いまいちど噛み締め、これの実践を通じて、醇乎として醇なる紳士たらんことを誓うものであります。

新島襄先生の生誕一五〇年を迎えて

望月満子

(同志社同窓会長)



今年はわれらの校祖新島襄の生誕一五〇年の記念の年である。『新島襄全集』が刊行され、新島研究会も結成され、今や新島学という学問のジャンルにもなり多くの学者が研究発表をしておられる。この中で私のような一介の卒業生が巻頭を飾るのは恥ずかしいが、つまらないながら持っている考えを述べさせて頂くことにした。

安中の藩主はすぐれた教育政策をとっていたが、その頃の学問の主流は漢学であり、オランダを通しての西欧の文化・学問はある所ではやや知られる程度であった。新島の回想の中に、ある日江湾に碇泊していたオランダの軍艦を見てひどく驚き、恐ろしくさえ思ったとある。また備中松山(高梁の板倉藩)の洋式帆船で江戸と備中玉島間を往復する機会に恵まれたが、船中での船員たちの低劣で放縱な生活にあきれ、帰藩してから友人に借りた日本語訳の「ロビンソン・クルーソー」を読んでは絶対に国外に出て、様子を知りたいと思ひ、そのためには先ず航海術を覚えねばなら

ないと決心した。一八六〇（万延元）年幕府は最初の使節団を米国に送りながらも、国民の海外渡航を禁じていた。新島は安中藩主に忠誠でなければならぬと思ひながら、何としても外国の脅威から日本を救わねばならぬと心を決め海外に出ることになる。この混乱の時代に持った洞察力の素晴らしさ、それまで国外に出ようと試みた人の殆どは失敗に帰しているこの試みを成功させる為の勇気と英知の三拍子がそろって国を脱出することに成功したと言うことになる、だが私はそれにもっと重大なものをつけ足したい。それは神の摂理である。神は新島襄に大きな仕事を託されたのである。上海、ボストンへの船上で新島は神を知る、そのあとのなり行きがそれを証明している。苦心惨憺したが善人の人々に支えられアーモスト大学、アンドーヴァー神学校を卒業して、立派な宣教師として帰国する。

第二に神の摂理は創立する学校の所在地を定めることに現われている。何故新島は京都に学校を創設したのか。これについては『新島研究』第八一号（二九九二）に吉田曠二氏の書いておられるところを見たい。新島は先ず知人で宣教師だったデイヴィスのいる神戸地区に創設しようと思ひ、汽船で関西へ来て大阪に滞在して此所を候補とも考えたが種々の理由でこれも断念、ついに京都に観光気分で作って来る。それは、それまでに山本覚馬とその妹の発行になる「京都案内」という英文パンフレットを読んでいたからである。山本覚馬は当時京都府顧問の要職にあつて京都の活性化を目指す活動家であつた。花の咲く春の京都をあちこち見て廻つた新島は自分の投宿した三条大橋近くに居を持っていた山本覚馬に出逢うことになる。吉田氏は一冊の「京都案内」と言うパンフレットが新島をして京都に行かせ、山本覚馬に出逢えたことを不思議ともいえる運命の糸にあやつられたと思つておられるが、これこそ神の摂理でなくて何であろう。当時、はや失明をしていた覚馬で

はあつたが新島の人物を見ぬき、学校用地を提供することになり、デイヴィスを加えた三人で学校創設という大事業に向かうのである。以前から計画されたものでなく、ただ一冊の小冊子が新島を京都に向かわせ、そこで初めて出会った人物と心が通じ大事業を完成させることになるのは神の摂理によるものとしか思えない。

一八七五（明治八）年見えざる神のみ手に導かれて、苦心の末新島襄が創立した同志社は次第に発展をとげ大学をはじめ、女子大学（短期大学を含む）四つの高等学校、四つの中学校と幼稚園をもつ学園になった。大きくなると、中味が薄くなると言われるので私は、校祖の精神がどのくらい卒業生や在学生に浸透しているか気になることがある。私は同窓会の会長を勤めさせて頂いたので地方の卒業生（女性）に接することが多かった。その時、いつも感じたのは校祖の血の通った精神が完全に受けつがれていることであつた。太平洋戦争の頃、寮に生活して食糧に苦労した人、外地で苦労をしてきて引上げてみれば家もなく、親戚は冷たく生きる力を失った人がすがつたものは同志社で培かわれたキリスト教の教えであり、また苦労をして家庭的にもよるところのない絶望の淵に沈みかけたとき同志社の精神とそれを受けついでいる同窓の姉妹たちに助けてもらったと、このような話を幾度も聞いた。このような感動の中に多くの卒業生がいる。同志社は宣教師養成の学校ではないが、真のキリスト教主義の教育がなされているならば、また校祖の思いは生きていると思う。校祖生誕一五〇年というこの年われわれはよく自分を顧み、また今この学園で勉強している人達の一人でも多くがよく新島精神を知って立派な人物となり社会に出て行って欲しいと念願して止まない。